良き人生のための終活マガジン

終活Cafe

RyuRyu SaiSai

http://www.shucafe.jp 終活カフェ 検索

定価780yen

2016 SPRING
首都圏版
vol.2

新しい生き方を提案する終活マガジン

新しい供養のカタチ
祈りの新提案

終活トピックス

最新ブラックフォーマルスタイル
弔事の基本

元気に生きる！パール世代
旬粥日和

大切な家族を守るための
相続基礎知識

「大相続時代」に備えておきたい 笑顔で相続を迎えるための 道先案内人「相続診断士」

05 相続専門家ファイル

相続診断協会

一橋 香織さん
相続診断士・ファイナンシャルプランナー

私のミニエンディングノート

＊人生最後に食べたいもの（最後の晩餐）
主人の手料理
＊人生最後に行きたいところ
京都・宇治の小川
（子供のころの思い出の場所）
＊天国に持っていきたいもの
思い出
＊天国で会いたい人
おばあちゃん
＊生まれ変わったらなりたい職業
今の仕事（天職だと思っている）

自身の「争族」経験を活かして、相談者に寄り添いサポート

ファイナンシャルプランナーを本業とする一橋香織さんは相談者の約8割が相続関係で、これまでに1200件もの相続案件を扱ってきた。一橋さんのキャリアの礎となっているのは、ご自身が実弟との間でまさに経験した「争族」の辛い思いである。一橋さんが20歳の時に経営者だった父親が急死。その10年後には母親が末期がんで余命宣告され、8ヶ月後にこの世を去った。仲の良かった弟から実家のある京都に呼び出され、遺産分割協議書に署名捺印した。弟をすっかり信頼していたため、書類の詳細までは確認しないままでいたが、実はその中身は相続放棄の書類であった。父から母に引き継がれた不動産物件をはじめとする財産はすべて弟のものとなり、一橋さんには何ひとつ相続されなかった。病気になった母親の看護のため、仕事をやめてホスピスに泊まり込みでの看病が続きに、身も心も憔悴しきっていたところにさらに追い打ちをかけるようなショックに、立ち直れないほどの心の傷を負った。次の職を探すのも苦労していた中で、資格が必要だと思い、選んだ道がファイナンシャルプランナー。この仕事を始めて、お客さんの悩み相談を聞きながら、自分の生の経験を話すとお客さんが心を開いてくれていった。それまで自分の人生をとことん追い詰めた「争族」の辛い経験が活かせる仕事と巡り合わせである。

「自分の大切なお子さんが争うことを誰もが防ぎたいと考えます」と一橋さん。家族に迷惑をかけたくなければ相続の準備は今すぐ始めたほうがいいとアドバイスする。そのために生前対策、エンディングノートの大切さを伝えている。

また、東京相続診断士会会長として人材育成や普及活動にも力を注いでいる。「100人いれば100通りの相続があり、同じでは考えられません。どれだけ相談者の想いを引き出し、寄り添えるかが大事です」とご自身の数々の経験から仕事をこなしてきた重みが感じられる。

一橋さんは今も弟さんとは絶縁状態だが、こうして仕事が得られて多くの人に貢献できている今となってみると許せる気持ちがあるという。これからも世の中から「争族」をなくすために精力的に活動していく。

一橋さんの著書

相続の相談は日頃あまり縁がなく、誰に相談したら良いのか分からないもの。知識がなく争族になる家族を笑顔相続に導くための道先案内人として2011年12月に相続相談診断協会が設立され、「相続診断士」という資格が発足した。現在、全国に約2万人の資格所得者が活動おり、相談者の現状をヒヤリングし、全国250カ所にある相続対策を得意とする事務所へとつなぎ、増加傾向にある相続の不安を解消するためのサポートしている。相続問題に悩まされる現代社会の救世主ともいえる「相続診断士」に迫ってみた。

桂 ひな太郎さん
噺家・相続診断士

相続をより身近に、よりわかりやすい〝笑顔相続落語〟

落語家の桂ひな太郎さんは、昨年11月に「相続診断士」の資格を取得した。人を笑わせる落語家がなぜ相続と関わりがあるのか疑問に思う人も多いだろう。相容れないとも思える相互関係に意外な事実が隠されていた。

12年ほど前に、ある司法書士事務所から成年後見についていくらセミナーを開催しても集客ができないので落語なら人が集まるかもしれないから手伝ってほしいと相談されたのがきっかけ。はじめは、成年後見や相続の分野をどう落語の世界で表現するのか、かなり難しかったとひな太郎さん。苦労して創作した話も最初はなかなかお客さんには受けなかった。それでもひな太郎さんは凝り性な性格も自身で勉強して情報を集めて話の内容に磨きをかけていった。すると次第に笑いがとれるようになった。その後相続診断協会と出会い、共に「相続落語」を創った。今では1万4千人以上が泣いて笑った大人気の寄席に成長した。相続落語は2部制になっており、1部でひな太郎さんが落語で場を盛り上げた後、2部の専門家の話もお客さんにはとてもすんなりと耳に入っていく。専門家とお客さんの橋渡し的な存在となっているのだ。

「一番大事なはずの身内がもめるのはうれしいことじゃないですよ」とひな太郎さん。ご自身も相続落語を続けていくなかで、自然と理解も深まり、いつしか相談にのれるようになっていった。「終活は自分のためでもあり、遺された人のため。子供のことを思わない親はいませんよ。人の気持ちが繋がることが大事です」

さらには高齢者の独居化がまねく犯罪にも目をむけている。「私は落語でも〝親切な人ほど疑え〟なんて冗談半分で言ってるんですけど、実際に騙されたという話をよく耳にします。お金の使い方を子供にバカにされたりしてなかなか話せない高齢者の方も多いです」ひな太郎さんはさまざまな問題が少しでも防げればと落語を通して情報発信しているのだ。

本来、古典落語も伝承されながら時代とともに変わっていくものである。「相続落語もどんどんバージョンアップしていきたい。最初から最後まで腹をかかえて笑える作品をつくるのが夢ですね」とひな太郎さんは抱負を語ってくれた。

私のミニエンディングノート

＊人生最後に食べたいもの（最後の晩餐）
おいしい酒とそば
＊人生最後に行きたいところ
モンサンミッシェル
＊天国に持っていきたいもの
ない
＊天国で会いたい人
古今亭志し朝師匠（謝りたい）
＊生まれ変わったらなりたい職業
噺家

一般社団法人 相続診断協会
㊟東京都中央区日本橋人形町2-13-9
ダヴィンチ人形町7階
☎03-6661-9593
http://souzokushindan.com/